

短大生の短期アメリカ研修の効果に関する研究

—アメリカ人のステレオタイプと英語力の自己評価への影響—

文野 峯子
杉本 明子

1. はじめに

1. 1 海外研修とその調査

近年、日本の大学では、春期や夏期の休みを利用した学生の海外研修が盛んに行われている。このような研修の多くは、参加学生が異文化に触れることにより国際人として成長することを最終目標に掲げている。そして、その目標は、研修の経験が学生の異文化に対する認識を深めること、また外国語能力や学習意欲が向上することにより達成されると考えられている。研修プログラムを一層目標に沿ったものとするために、プログラムの評価とその結果報告が行われてきたが、研修が学生に「どのような変化をもたらしているかについてはいまだに明らかにされたとは言い難い」(石野、正木、VISGATIS、木村1999)というのが現状である。

海外研修の効果を明らかにするための1つの試みとして、石野他(1999)は短期大学の学生の短期海外研修(英語圏3カ所)を対象に、短期海外研修プログラムが参加学生の異文化に対する自信・意識・態度にもたらした変化を調べるための質問紙調査を行った。この調査では、1つの研修でどのような変化が見られたかだけでなく、研修先・研修内容が異なる3種類を比較・分析し、その結果、学生の異文化および外国語への意識における変化は研修先によって異なりが見られること、変化が見られる項目と見られない項目があること、海外研修参加以前の海外滞在経験者より初めての経験者の方に自信の向上が顕著に見られることなどを報告している。さらに、2つの研修先ではホスト・ファミリーにも学生の変化について問う質問紙調査を行ったところ、ホストの評価は学生の自己評価よりも低かったことも指摘している。

1. 2 研修に影響を及ぼす要因

石野他(1999)が注目した「研修先・研修内容による差」は、一口に「異文化に触れる体験」と言っても、その体験の内容によって参加学生が異なる影響を受ける可能性があることを示している。受入先(アメリカかオーストラリアか、都市か田舎か)や研修内容(ホームステイかファームステイか)の違いだけでなく、英語研修の内容やホストファミリーの社会・経済的地位、家族構成、さらには、学生個人個人の英語能力や性格、海外滞在の経験の違いなどにより、参加学生が研修から受ける影響が異なってくると考えられる。

このように異文化接触が与える効果についての調査では、研修先によって異文化体験が大きく異なり、また、参加学生の個人差もあるため、石野等も指摘するように「アメリカホームステイ体験」と一般化できない状況がある。先行研究では「研修が学生に与える変化」のみに焦点が当てられてきたが、変化と研修内容・参加学生に関する諸要因の間の関係性を見ることも重要であると考えられる。

また、同じ現象も視点が変わると異なってくる。石野等の報告でも参加学生の自己申告の結果とホスト・ファミリーの評価の結果が異なっていたことが報告されている。分析に具体性と客観性を付与するためにも、また、その研修内容の独自性と一般性を明確にする意味でも、変化が起こった文脈についての情報を考慮した解釈が重要であろう。

2. 調査の目的

本研究は、短期研修が短大生にどのような心的変化をもたらしたのかについて、心的変化と研修における経験・参加学生に関する諸要因の関係性から明らかにすることを目的とした。

本研究の分析においては、以下の3つの問題に焦点を当てた。

- 1) アメリカ研修により、短大生のアメリカ・アメリカ人に対するステレオタイプや英語力の自己評価がどのように変化したか。
- 2) アメリカ研修でのどのような経験（「ホームステイ経験」「ACLPの英語の授業」「その他のアメリカ人との接触経験」）がそれらの変化に影響を与えたのか。
- 3) 学生の過去のホームステイ経験は今回のホームステイの経験にどのような影響を与えたのか。

3. 方法

3. 1 参加学生

短期研修には、愛知県の短期大学1年生22名、2年生3名の計25名が参加した。そのうち初めて海外に出る者は16名、初めてアメリカ社会と接触する者は22名で、過去に海外でホームステイを経験したことがある学生は7名（内アメリカ2名）であった。

3. 2 短期アメリカ研修プログラム

研修プログラムは、以下の内容で行われた。

研修の目的	英語に関する知識や運用能力をより深める。また、アメリカの文化や生活・風俗・歴史に直に触れ、国際人としての視野を広げる。
期 間	1999年2月15日～3月1日（15日間）
場 所	アメリカ、カリフォルニア州、サンバナーディーノ市

内 容	全員近隣の家庭にホームステイ 午前は州立大学語学研修所ACL Pにおいて語学研修（月曜日～金曜日） 午後はアメリカ文化を理解するための活動 週末は周辺都市・観光地に小旅行
-----	--

3. 3 分析方法

本調査は、まず短期アメリカ研修が学生に与えた心的変化、および、変化に影響を与えた要因を、研修前後に行ったアンケート結果をもとに量的分析を行った。次に、分析結果に基づき心的変化に影響を与えたと考えられる要因（ホームステイとACL Pの英語授業）について、学生の自由記述と引率者の観察をもとに質的分析を行い、心的変化の背後にある文脈を考察した。

4. 統計分析結果

統計分析の結果は以下の通りである。なお、本稿において用いられる統計解析は全て有意水準を5%とした。

4. 1 アメリカ・アメリカ人のステレオタイプと英語力の自己評価の変化

4. 1. 1 アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ

アメリカ研修により、短大生が持つアメリカ合衆国やアメリカ人のステレオタイプがどのように変化したのかについて調べた。アメリカ合衆国・アメリカ人のステレオタイプに関する25の質問項目（5件法）の各々と、「アメリカ人の国民性」を測定する質問項目のカテゴリー（項目4、5、6、7、8、10の総計）、及び、「アメリカ人の対外国態度」を測定する質問項目のカテゴリー（項目11、12、13、14、16の総計）の事前テスト・事後テスト各々の平均値と標準偏差、事前テストと事後テストの差（事後テスト－事前テスト）の平均値と標準偏差を表1に示す。なお、「アメリカ人の国民性」と「アメリカ人の対外国態度」を測定する質問項目のカテゴリーは、中村、慎、平、川本、横山、高田（1994）の因子分析の結果に基づいて作られたステレオタイプの要因である。

事前テストと事後テストの差をt検定を用いて調べた結果、質問項目4（ $t=2.37, p<0.05$ ）、質問項目6（ $t=2.40, p<0.05$ ）、質問項目7（ $t=3.60, p<0.01$ ）、質問項目10（ $t=2.69, p<0.05$ ）、質問項目20（ $t=3.30, p<0.01$ ）と「アメリカ人の国民性」（ $t=2.69, p<0.05$ ）において、事後テストの平均が事前テストの平均よりも統計的に有意に高かった。このことより、短大生は、アメリカでの研修を通して、より「アメリカ人は親切だ」「アメリカ人は付き合いやすい」「アメリカ人は信頼できる」「アメリカ人は日本人と本当に親しくなれる」「アメリカ人はあたたかい」と思うようになり、「アメリカ人の国民性」に対する評価も高くなっていることが示された。同時に、統計的に有意な値は得られなかったものの、質問項目16（ $t=-1.74, p<0.1$ ）、質問項目21（ $t=-1.74, p<0.1$ ）、質問項目24（ $t=-1.74, p$

<0.1) において、事後テストの方が事前テストよりも低い傾向が見られた。このことから、アメリカ研修により「アメリカ人は外国人の評価を気にしすぎる」「アメリカ人は偏見がある」「アメリカ人のイメージは男女平等」という印象を持たなくなる傾向があることが示唆された。

表1 アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ

質問項目	事前テスト		事後テスト		事後-事前テスト	
	M	SD	M	SD	M	SD
1. アメリカ人の友達が欲しい	4.60	0.91	4.76	0.52	0.16	0.90
2. アメリカ人と深く付き合いたい	4.00	1.26	4.12	1.13	0.12	1.39
3. アメリカの文化に関心がある	3.72	0.94	4.00	1.22	0.28	1.34
4. アメリカ人は親切だ	3.16	0.99	3.84	1.11	0.68	1.44
5. アメリカ人は正直だ	3.60	1.29	3.72	1.34	0.12	1.81
6. アメリカ人は付き合いやすい	2.96	1.02	3.48	1.33	0.52	1.08
7. アメリカ人は信頼できる	2.64	1.19	3.32	1.22	0.68	0.95
8. アメリカ人はプライバシーを大切にする	3.52	1.39	3.84	1.21	0.32	1.35
9. アメリカ人はカッコいい	3.72	1.34	4.08	1.25	0.25	1.36
10. アメリカ人は日本人と本当に親しくなれる	3.12	1.13	3.84	1.14	0.72	1.34
11. アメリカ人は日本を良く理解していない	3.04	0.98	3.08	1.15	0.04	1.49
12. アメリカ人は言うこととすることが違う	2.72	1.14	2.44	1.29	-0.28	1.10
13. アメリカ人は自国の人と外国人で態度が違う	2.76	1.20	3.24	1.51	0.48	1.56
14. アメリカ人は欧米人と日本人で態度が違う	2.88	1.33	2.96	1.37	0.17	1.43
15. アメリカ人と日本人の結婚はうまくいく	2.92	1.15	3.08	1.22	0.16	1.07
16. アメリカ人は外国人の評価を気にしすぎる	2.68	1.14	2.32	1.11	-0.36	1.04
17. アメリカ人は競争心が強い	3.44	1.19	3.33	1.27	-0.13	1.33
18. アメリカ人は勉強好きである	2.84	1.21	3.20	1.32	0.36	1.19
19. アメリカ人は責任感がある	3.20	0.91	3.52	1.08	0.32	1.31
20. アメリカ人はあたたかい	3.25	0.90	4.04	1.02	0.75	1.11
21. アメリカ人は偏見がある	3.00	0.82	2.56	1.36	-0.44	1.26
22. アメリカ人は勤勉である	2.84	1.14	2.96	1.37	0.12	1.20
23. アメリカ人は考えが新しい	3.52	1.05	3.08	1.38	-0.44	1.39
24. アメリカ人のイメージは男女平等	3.76	1.23	3.32	1.52	-0.44	1.26
25. アメリカ人は能力主義である	3.60	1.00	3.68	1.35	0.08	1.04
アメリカ人の国民性	19.00	5.27	22.04	5.56	3.04	5.65
アメリカ人の対外国態度	14.08	4.67	14.08	4.66	0.46	3.90

注) M=平均、SD=標準偏差

4. 1. 2 英語力の自己評価

短大生の自己による英語力の評価が、アメリカでの短期研修により、どのように変化したのかについて調べた。短大生が4件法で自己評価した英語の4技能(聞く、話す、読む、書く)、及び、英語全般(4技能の総計)の事前テスト・事後テスト各々の平均値と標準偏差、事前テストと事後テストの差(事後テスト-事前テスト)の平均値と標準偏差を表2に示す。

事前テストと事後テストの差をt検定を用いて調べた結果、全ての項目において統計的に有意な差は見られなかった。しかしながら、表2の各々の平均値か

表2 英語力の自己評価

質問項目	事前テスト		事後テスト		事後-事前テスト	
	M	SD	M	SD	M	SD
1. 聞く	2.40	0.58	2.52	0.71	0.12	0.67
2. 話す	1.92	0.64	2.16	0.75	0.24	0.72
3. 読む	2.48	0.59	2.60	0.76	0.12	0.67
4. 書く	1.96	0.45	2.12	0.78	0.16	0.69
5. 英語全般	8.76	1.67	9.40	2.44	0.64	1.98

ら明らかのように、4技能各々と英語能力の全般において、事前テストより事後テストの方が高い評定をする傾向があることが示唆された。これは、石野他（1999）の調査結果と一致する。すなわち、アメリカ研修により短大生は自分の英語力にやや自信を持つようになったと言えるかもしれない。今回の調査では、僅か25名の短大生の回答を統計的に分析しただけであるが、今後の調査においてより多くの回答者数を得ることにより、統計的に有意な値が得られるかもしれない。

4. 2 アメリカ研修における経験とその影響

アメリカ研修におけるどのような経験が、上述のアメリカ・アメリカ人のステレオタイプや英語力の自己評価の変化に影響を及ぼしたのであろうか。アメリカ研修における経験のうち「ホームステイ経験」「ACLPの英語の授業」「その他のアメリカ人との接触経験」の3つに焦点を当て、以下各々の影響について考察する。

4. 2. 1 ホームステイ経験の影響

(a) アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ

短大生が、事後テストにおいて、ホームステイ経験に関する5件法の質問項目1～6について回答した結果を表3に示す。「ホームステイ全般」は、質問項目1～6の評点を合計した値である。

ホームステイの経験とアメリカ・アメリカ人のステレオタイプの変化の関係性について検討するために、「ホームステイ全般」と「アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ」の変化（質問項目1～25と「アメリカ人の国民性」「アメリカ人の対外国態度」における事前テストと事後テストの差）の相関を調べた。その結果、質問項目5（ $r=0.49, p<0.05$ ）、質問項目9

表3 ホームステイの経験

質問項目	M	SD
1. 楽しかった	4.56	0.65
2. 英語の上達に役に立った	4.04	1.24
3. アメリカ文化の理解に役に立った	4.28	0.94
4. 家族は親切だった	4.52	0.96
5. 家族と一緒に過ごす時間が十分あった	3.88	1.24
6. 家族と英語でたくさん話した	3.64	1.19
7. ホームステイ全般	24.92	4.41

($r = 0.52, p < 0.01$)、質問項目12 ($r = -0.48, p < 0.05$)、質問項目15 ($r = 0.42, p < 0.05$)、質問項目19 ($r = 0.59, p < 0.01$)、質問項目20 ($r = 0.41, p < 0.05$)、質問項目22 ($r = 0.50, p < 0.05$)、質問項目23 ($r = 0.46, p < 0.05$)、及び、「アメリカ人の対外国態度」($r = -0.42, p < 0.05$)において統計的に有意な値が得られた。このことより、ホームステイの経験に対する評価が高い程、「アメリカ人は正直だ」「アメリカ人はかっこいい」「アメリカ人と日本人の結婚はうまくいく」「アメリカ人は責任感がある」「アメリカ人はあたたかい」「アメリカ人は勤勉である」「アメリカ人は考えが新しい」と思うようになり、「アメリカ人は言うこととすることが違う」とは思わなくなる傾向があることがわかった。また、「アメリカ人の対外国態度」に対してもよいイメージを持つようになったことが示された。統計的に有意な値は得られなかったものの、「ホームステイ全般」と「アメリカ人の国民性」との間にも弱い相関がみられた ($r = 0.36, p < 0.1$)。このことから、よいホームステイの経験を持つことによりアメリカ人の国民性に対してよいイメージを抱くようになる傾向があることが示唆された。

(b) 英語力の自己評価

ホームステイの経験は、アメリカ研修の前と後の短大生の英語力の自己評価の変化にどのように関係しているのでしょうか。このことを検討するために、「ホームステイ全般」と「英語力の自己評価」の変化（4技能「聞く」「話す」「読む」「書く」と「英語全般」における事前テストと事後テストの差）の相関を調べた。その結果、「聞く」「話す」「読む」「書く」と「英語全般」の全てにおいて統計的に有意な値は得られなかった。このことより、ホームステイの経験は、学生の英語力の自己評価にほとんど影響を与えていないということが示唆された。

4. 2. 2 ACLPの英語の授業

(a) アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ

短大生が、事後テストにおいて、ACLPの英語の授業に関する6つの質問項目（5件法）について回答した結果を表4に示す。「ACLP全般」は、質問項目1～6の評点を合計した値である。

ACLPの英語の授業がアメリカ・アメリカ人のステレオタイプの変化にどのように関係しているのかを検討するために、「ACLP全般」と「アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ」の変化（質問項目1～25と「アメリカ人の国民性」「アメリ

表4 ACLPの英語の授業

質問項目	M	SD
1. 楽しかった	3.72	1.34
2. 英語能力の向上に役に立った	3.44	1.29
3. 教師の教え方はよかった	3.88	1.09
4. 教師は親切だった	4.56	0.65
5. 自分は授業に積極的に参加した	4.04	0.93
6. 教師と英語でたくさん話した	3.48	1.05
7. ACLP全般	23.12	4.94

カ人の対外国態度」における事前テストと事後テストの差)の相関を調べた。その結果、全ての質問項目において統計的に有意な値は得られなかった。しかし、統計的に有意ではなかったものの、「ACLP全般」と質問項目11との間に弱い相関がみられた ($r = 0.34, p < 0.1$)。このことから、ACLPの英語の授業において良い経験を持つことにより「アメリカ人は日本を良く理解していない」という思いを抱くようになる傾向があることが示唆された。これは、ACLPの英語の授業で教師と親しく付き合うことにより、アメリカ人の日本に対する知識や認識不足をより実感したためかもしれない。

(b) 英語力の自己評価

ACLPの英語の授業は、短大生の英語力の自己評価に影響を与えたのであろうか。このことを検討するために、アメリカ研修前後での「英語力の自己評価」の変化(英語の4技能「聞く」「話す」「読む」「書く」と「英語全般」における事前テストと事後テストの差)と「ACLP全般」の相関を調べた結果、「聞く」($r = 0.40, p < 0.05$)において統計的に有意な値が得られた。このことより、ACLPの英語の授業において良い経験を持つことが、短大生の英語を聞く能力に関する自己評価を高めたことが示唆された。統計的に有意な値は得られなかったものの、「ACLP全般」と「英語全般」との間にも弱い相関がみられた ($r = 0.36, p < 0.1$)。このことから、ACLPの英語の授業に対する満足度が高い程、英語力全般の自己評価が研修後に高くなる傾向があることが示唆された。

4. 2. 3 その他のアメリカ人との接触経験

短大生はアメリカ研修中に、ホームステイ先の家族やACLPの英語の授業の教師以外にもアメリカ人と接触している。ホームステイ先の家族や英語の教師以外に、平均2.72人(標準偏差= 1.31)のアメリカ人と接し、平均接触回数は6.36回(標準偏差=5.80)であった。接触したアメリカ人の中で最も多かったのはホームステイ先の家族に関わる人々で、例えば、ホームステイ先の家族の友人、友人の子ども、隣人、子どもの友達、親戚、仕事関係の人や友達のホームステイ先の家族であった。その他、デパート、スーパー、本屋、CDショップ、ブティック、ネイルストアの店員や、レストラン、マクドナルドの店員などが多かった。また、ディズニーランドやユニバーサルスタジオの職員なども見られた。

(a) アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ

その他のアメリカ人との接触経験と研修前後でのアメリカ・アメリカ人のステレオタイプの変化は関係しているのであろうか。これらの関係性について検討するために、「接触したアメリカ人の人数」「接触回数」の各々と「アメリカ・アメリカ人のステレオタイプ」の変化(質問項目1~25と「アメリカ人の国民性」「アメリカ人の対外国態度」における事前テストと事後テストの差)の相関を調べた。

その結果、「接触したアメリカ人の人数」に関しては、質問項目15 ($r = 0.42, p < 0.05$)において統計的に有意な値が得られた。このことより、接触したアメリカ人の人数が多い程、

「アメリカ人と日本人の結婚はうまくいく」と思うようになることが示された。また、統計的に有意な値は得られなかったものの、質問項目5 ($r=0.35, p<0.1$)、質問項目7 ($r=0.36, p<0.1$)、質問項目17 ($r=0.35, p<0.1$)、質問項目21 ($r=-0.36, p<0.1$)、質問項目22 ($r=0.37, p<0.1$) との間にも弱い相関がみられた。このことから、多くのアメリカ人と接したことにより、より「アメリカ人は正直だ」「アメリカ人は信頼できる」「アメリカ人は競争心が強い」「アメリカ人は勤勉である」と思うようになり、逆に「アメリカ人は偏見がある」と思わなくなる傾向があることが示唆された。

「接触回数」に関しては、質問項目2 ($r=0.43, p<0.05$)、質問項目3 ($r=0.50, p<0.05$)、質問項目15 ($r=0.49, p<0.05$)、質問項目21 ($r=-0.46, p<0.05$)、質問項目25 ($r=-0.50, p<0.05$) において統計的に有意な値が得られた。この結果より、アメリカ人と接触する回数が多かった程、「アメリカ人と深く付き合いたい」「アメリカの文化に関心がある」「アメリカ人との結婚はうまくいく」と思うようになり、逆に、「アメリカ人は偏見がある」「アメリカ人は能力主義である」と思わなくなる傾向があることがわかった。

(b) 英語力の自己評価

その他のアメリカ人との接触経験は英語力の自己評価に影響を与えたのであろうか。アメリカ研修前後での「英語力の自己評価」の変化（英語の4技能「聞く」「話す」「読む」「書く」と「英語全般」における事前テストと事後テストの差）と「接触したアメリカ人の人数」「接触回数」の各々との相関を調べた結果、全てにおいて統計的に有意な値は得られなかった。この結果より、アメリカ人との接触経験は英語力の自己評価にほとんど影響を与えないことがわかった。

4. 3 研修前のホームステイ経験が今回のホームステイ経験に与える影響

今回のアメリカ研修においてホームステイをする以前に、既に海外でホームステイをした経験を持つ学生が7名いた。滞在国は、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国で、滞在期間は各々1週間から3週間程度であった。

今回はじめてホームステイをする学生と過去にホームステイの経験がある学生とでは、今回のアメリカ研修のホームステイに対して感じ方が異なっているのであろうか。過去にホームステイ経験のある学生とない学生の各々における、事後テストのホームステイ経験に関する質問項目の回答の平均値と標準偏差を表5に示す。ホームステイ経験のある学生とない学生では、今回のホームステイに対して感じ方に違いがあるかどうかを調べるために、質問項目1～6と「ホームステイ全般」に対する回答の各々において、ホームステイ経験のある学生とない学生の間でt検定を用いて調べた。その結果、質問項目1「楽しかった」($t=2.39, p<0.05$)、質問項目4「家族は親切だった」($t=2.47, p<0.05$)と「ホームステイ全般」($t=2.65, p<0.05$)において、ホームステイ経験のない学生の平均がホーム

ステイ経験のある学生の平均よりも統計的に有意に高かった。また、統計的に有意差は得られなかったものの、質問項目5「家族と一緒に過ごす時間が十分にあった」($t = 2.27, p < 0.1$)、質問項目6「家族と英語でたくさん話した」($t = 1.75, p < 0.1$)においても、同様に、ホームステイ経験のない学生の平均がホームステイ経験のある学生の平均よりも高い傾向にあることが示唆された。

表5 研修前のホームステイ経験が今回のホームステイ経験に与える影響

質問項目	経験なし		経験あり	
	M	SD	M	SD
1. 楽しかった	4.78	0.43	4.00	0.82
2. 英語の上達に役に立った	4.17	1.15	3.71	1.50
3. アメリカ文化の理解に役に立った	4.22	1.00	4.43	0.79
4. 家族は親切だった	4.89	0.32	3.57	1.40
5. 家族と一緒に過ごす時間が十分あった	4.28	0.83	2.86	1.57
6. 家族と英語でたくさん話した	3.89	1.13	3.00	1.15
7. ホームステイ全般	26.22	3.25	21.57	5.44

4. 4 統計分析結果のまとめ

以上の結果をまとめると次の通りである。

- 1) アメリカ研修により、短大生はアメリカ人の国民性に対して全般によい印象を持つようになる。
- 2) 英語力の自己評価については、統計的に有意ではなかったが、4技能全般において研修後の方が高い評価をする傾向がある。
- 3) 「ホームステイ経験」と「その他のアメリカ人との接触経験」が短大生のアメリカ・アメリカ人のステレオタイプに影響を与える。すなわち、ホームステイにおいてよい経験を持ったり、アメリカ人との接触経験が多いほど、アメリカ人の人柄に対して良いステレオタイプを持つようになる。
- 4) 「ホームステイ経験」と「その他のアメリカ人との接触経験」は、英語力の自己評価にはほとんど影響を与えていない。
- 5) 「ACLPの英語の授業」は英語力の自己評価に影響を与えている。特に、ACLPの英語の授業で充実した経験を持った学生ほど、英語を聞く能力が向上したという実感を持つようになる。
- 6) ホームステイ経験のない学生の方が、ホームステイ経験のある学生よりも、ホストファミリーに対して良い印象を持ち、ホームステイ経験を楽しんで全般的に高く評価している。

5. 記述および観察による分析

記述・観察からの情報をもとに、短大生の心的変化（アメリカ人のステレオタイプと英語の自己評価の変化）が生じた文脈を質的に検討した結果を以下に記す。

5. 1 ホームステイ環境

研修が行われたサンバナディーノ市は、緑が少ない砂漠地帯にある。ホームステイ家族が住む下町周辺は、夜間物騒なため24時間ストアの入り口にはガードマンが立っているという環境である。山の手の郊外は環境もよく、中・上層階級が住んでいるが、学生のホスト家族は低・中所得層が多い下町周辺に集まっていた。ホスト家族のエスニシティーは、3分の1がヒスパニック系、3分の1が黒人系、残りが白人やアジア系と多様であった。ホストの家族構成も、一般の親子の家庭だけでなく老人の一人暮らし、老夫婦2人暮らし、母子家庭、再婚同士の家族などもありバラエティに富んでいた。このように、地域環境も、受け入れ家族の環境も、短大生がこれまで日本で経験した環境とは大きく異なり、かなりのカルチャーショックが予測される環境であった。

学生がホスト家族と接触する時間は、平日の朝食、夕食、夕食後とキャンパスへの自家用車による送迎時間であった。週末はプログラム全体の泊り込み旅行があったため、ホスト家族との実質接触時間は、2週間のうち平日のみで一日平均2, 3時間であった。

5. 2 記述に見る学生のホームステイ体験

量的分析の結果、このような環境におけるホームステイの経験は、学生のアメリカ・アメリカ人に対するイメージを変化させたことが示された。また、同様の環境におかれた場合、ホームステイの経験を持つ学生より今回初めてホームステイを経験する学生の方が、ホームステイに対する評価が高いという結果が出た。以下、事前事後調査におけるホームステイ経験に関する自由記述をもとに、ホームステイを初めて経験する者と経験者各々がホームステイを通じてどのような経験をしたか、また、それをどう受けとめたかについてみた。

事前調査の「ホームステイ体験への期待」では、ホームステイ経験者も未経験者もいずれも「現地の人々との交流」「アメリカの文化に触れる」「英語力をのばす」と一般的な期待を表明していた。それに対して事後調査の「ホームステイの感想」において、経験者と初めて体験した者の記述内容に大きな差が見られた。記述内容を「とまどいの経験（マイナス評価）」と「よい経験（プラス評価）」に分けて整理してみると、初めて体験した者のコメントには表面的なプラス評価の記述が多く、経験者のコメントには具体的なマイナス評価の記述が多かった。初めて体験した者のプラスのコメントのほとんどは「アメリカ人は親切だ」「アメリカの子供は日本人と比べてのびのびしている」などアメリカ社会やアメリカ人についての一般化されたイメージであった。初めて体験した者のマイナスのこ

ントは、「はじめのころ、英語が分からず緊張した」「アメリカは銃社会だから怖いと思
不安だった」が多かった。このことから、「アメリカ・アメリカ人に対して、実際に接
触する前は悪いイメージを持っていたが、実際に触れてみるといい国、いい人たちであ
った。」「異文化接触におけるとまどいは、アメリカ人が悪いのではなく自分の英語力
がないため、自分の認識が誤っていたために生じた」ととらえていることがうかが
える。

一方、経験者は、「自分で決めた時間を他人に押し付けるわりに、迎えの時間には遅
れてきても謝りもしない態度が納得できない」などのマイナスのコメント、「だらしな
い日常生活態度は嫌いだけど、お茶をたててあげたら日本文化に興味を示してくれ
たときはうれしかった」、「今回の家族は前の家族のように話しかけてくれなかつ
たが、それにより自分からの意思表示が大切なことを教えられた」、「私のこと
をかまってくれる時間がほとんどなくて寂しかったけど、子供たちが忙しい母親
をよく助けていた」のように、今回のホストを個人としてよく観察し、具体的に
とらえていた。これは初めて体験した者が少ない経験をもとに、「アメリカ人は××」
と一般化しているのと対照的である。異文化理解の段階が進むと、「ステレオタイ
プ視がなくなり、一人一人のユニークさが尊重できるようになる」（八代他1998）
と指摘されているが、今回の調査においても2回目・3回目の外国体験は、学生に
「外国人にもいろいろある」ということを気づかせ、個人差に注目することを可
能にしたことが示唆された。

初めての異文化接触経験者が、現象をプラスに評価しがちなことは、異文化接
触の際によくみられる「ハネムーン」現象^{注1}と考えられるが、この現象は今回も
初めて体験した者によく見られた。たとえば、小学生が休み時間でもないのにだ
まってトイレに行ったり、教師の許可を得ることもなく活動がしやすい場所に
勝手に席を移動したりするなどを、今回ホームステイを初めて体験した者は「
のびのびしている」とプラス評価し、規律もなくルーズだと解釈した者はいな
かった。また、経験者の一人は、ファーストフードの夕食で夕食を済ませる
ホストの母親の生活態度をマイナス評価しているに対し、同様の体験をした
初体験者はむしろ特別待遇の「ごちそう」をしてくれたととらえていた。中
には、食事代を払うべきか心配する者もいた。

5. 3 A C L Pの英語研修について

A C L Pの授業は、月～金の9時～3時半まで毎日行われた。今回の研修でも
っとも時間を費やした活動である。統計的分析の結果では、A C L Pの授業全
体の評価と「聞く」能力向上に相関が見られたものの、「A C L Pの授業は英
語能力の向上に役に立ったか」（表3）に対する評価平均は3.44とあまり高
くなく、ホームステイ経験の満足度「アメリカ文化の理解に役立った」（評
価平均4.28）と比較しても、A C L Pの授業に対する満足度が低いことが伺
える。

学生がACLPについて感想を述べている記述部分を見てみると、25名中13名が「C教師の授業はわかりやすく楽しいが、M教師の英語は速すぎてわからない。面白くない。」というコメントをしている。また、ローテーションの都合でM教師の授業が多くなったクラスの学生は、クラス編成の方法についても不満を表明している。

引率者の観察によると、M教師の授業では授業内容と同時に教師の指示の英語が学生のレベルよりも上であったため、学生は求められていることがわからず応えることもできないという状況がしばしば発生していた。また、学生のコミュニケーション能力が不十分なため、学生からの発話が少なく、ACLPの活動全体を通して学生は聞き役をつとめていた。今回は短期間の研修である上に小人数であったため、英語の能力でクラス分けを行わなかったが、仮に能力別に分けたとしても、2クラスの英語能力差は僅かであり、同様の結果になったと予想される。

5. 4 「英語力自己評価」調査について

「ホームステイ体験」の感想には、25名中18名が英語によるコミュニケーションの体験について書いている。最も多いのは、「はじめは言われたこともわからずとまどったが、だんだんわかるようになりうれしかった。ホストは、ゆっくり簡単な言葉で繰り返したり、ジェスチャーを交えて話してくれたのでわかった。」と、コミュニケーションができたことの喜びを表明しているコメントである。中には、言いたいことが正確に伝わらず、自分の英語力が足りないと感じた者、次回までに英語をしっかりと勉強しようと決意表明をする者などもいたが、全体に2週間の後半では英語で会話ができるようになったと感じている。しかし、今回の統計分析の結果には、学生のホームステイなどにおけるコミュニケーション力の伸びの認識が明確に表れなかった。その原因の一つとして、調査対象者の数が25名と少なかったことが考えられる。しかし、それだけでなく調査者と学生の間に「英語力」という用語の解釈においてズレがあった可能性もある。調査者は「英語力」を広く捉えコミュニケーション力も含む力と考えているのに対し、学生は、授業やテストなどで目にみえる形で評価できる力と考えたのかもしれない。いずれにしても、英語力についての心的変化の調査においては、今後調査方法を検討する必要があるだろう。

6. 全体的考察

短期のアメリカ研修が短大生にもたらした心的変化とその原因となる要因について量的・質的分析を行った結果、次のことが示唆された。

- 1) アメリカ研修での体験は、短大生のアメリカ・アメリカ人に対するステレオタイプに変化をもたらし、このステレオタイプの変化にはホームステイの経験及びその他のアメリカ人との接触が大きく影響を与えること。

2) ホームステイ経験のない学生の方が、ホームステイ経験のある学生よりも、ホストファミリーに対してよい印象を持ち、ホームステイ経験を楽しみ、全体的に高く評価している。また、初めてホームステイを経験した学生が異文化の表面的な解釈にとどまる傾向が強いのにに対して、研修前にホームステイ経験がある学生は、個々の独自性を具体的に捉える傾向があること。

3) 「英語力の自己評価」は、研修後に上昇する傾向が見られたが、その変化はアメリカ・アメリカ人に対するステレオタイプの変化ほど大きくなかったこと。英語力の自己評価には、短大生がアメリカ研修中に受けた英語の授業、特に、英語教師の教え方、教授内容、クラス分けなどの要素が大きな影響を与えていたこと。

1) の「ステレオタイプの変化」から、今回の研修で短大生が異なる視点から他文化を見る機会を持った可能性がうかがえる。これは、研修が目標の一つとした「異文化に対して視野を広げること」への第一歩であると捉えることができるかもしれない。

今回の質問紙調査において、短大生がホスト家族とのコミュニケーションができるようになったことを報告しているにもかかわらず、英語力の自己評価には反映されていないことが明らかになったが、これは、調査者と学生との間で「英語力」という用語についての理解にズレがあったからかもしれない。

今後海外研修が盛んになり、それに伴い研修のあり方を検討するための調査・分析は一層その重要性を増すと考えられる。より有意義な研修のためにも、今回のような事例研究結果が数多く蓄積され、より洗練された調査方法・技術が開発される必要があるであろう。

注1

八代京子他『異文化トレーニング』三修社（1998）では、アドラー（Adler, P. S. 1975）の「異文化への移行体験」の成長過程に見られる5つの段階を紹介している。この成長過程の理論によれば、「異文化接触の第一段階では、新しい物を見たり経験したりすることからくる興奮や幸福感が著しく、それは結婚生活におけるハネムーンの時期にあたる」ということである。

参考文献

石野はるみ、正木美知子、VISGATIS, Brad、木村真治. (1999). 「短期海外研修のもたらすもの」—How short-term overseas study effects students 『Language Teacher』 23(6), 37—42, JALT.

中村俊哉、慎栄根、平直樹、川本ひとみ、横山恭子、高田夏子. (1994). 「在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験」『教育心理学研究』42, 291—297.

八代京子、町恵理子、小池浩子、磯貝友子. (1998). 『異文化トレーニング』三修社

英文タイトル

The effects of the short-term overseas study on junior college students' stereotype of American and self-evaluation of English ability

要旨 This study investigated the influence of the short-term stay in US on junior college students' stereotype of American and self-evaluation of English ability. The followings were found through quantitative and qualitative analysis of the pre and post questionnaire and the instructor's observation; 1) the short-term stay in US tended to improve their stereotype of American and self-evaluation of English ability, 2) experience of staying with an American family and interaction with various Americans seem to have influenced their stereotype of American, 3) English classes they took in US might have changed their self-evaluation of listening ability, 4) students without prior homestay experience tended to have enjoyed more and had better impression of a host-family than those with such prior experience.

キーワード：短期海外研修、短大生、アメリカ人のステレオタイプ、英語能力の自己評価、ホームステイ

key words: short-term overseas study, junior college students, stereotype of American, self-evaluation of English ability, home stay